特240
934

彈誓上人略傳

始

彈誓上人籠居の石窟

彈誓上人御加持水

△はしがき▽

南信の一名勝として世に聞えた唐澤山は、法國山阿彌陀寺と切離しては考へられないは勿論、唐澤の名がやがて法國山阿彌陀寺を意味するものと見て差閊ない場合が多い現狀でありまして、地方人が今猶靈地として甚深の尊信を有することは、毎年四月大回向會の盛況に徴して明でありまして、其の唐澤の開山が即ち彈誓上人なのであります。

上人は五年間この山に籠られ、木食生活を繼續し髭も髪も伸びるに任せ、粗末な法衣に肌を蔽うて一意唱名念佛の宣傳化導に從はれたのでせう、今上人の遺跡の山内に存する物を數へて見ますと、

（一）彌陀石窟は彈誓上人籠居修業の遺趾で、本堂背後の崖腹に在り、自然の岩洞の僅に膝を容れ雨露を凌ぐに足るものです。

（二）彈誓上人御加持水は鐘樓傍の巖根から迸り出る清冽肌を刺す樣な寒泉であります、上人水を求め、錫杖を以て岩を突いて忽この靈泉を得たまふと傳へてゐます。

（三）冬住は鐘樓下、今、十王堂、觀月臺の有る屏風岩ぞひの平地です。氷點下何十度といふ極寒を避けて、上人は冬期を此處に過されたとて、此の

名を呼ぶ次第です。

（四）龍燈の松は本堂の南約一丁の、危巖の突端にそびえ立つて、下千仞の谷に臨む古松です、彈誓上人の石窟に修業せられた時、此の松に夜々龍燈が出現したと傳へられてゐます。

（五）彈誓上人爪彫の碑は冬住下の路傍にあります。

御加持水、龍燈の松、爪彫の碑、等古來名僧傳に從屬する極めて常套的な傳說として、寧陳腐に感ぜられようかと思ひますが、兎も角も上人の遺蹟として、古老の口碑に傳へられて、上人の偉人たる事と共に、誰知らぬ者なきに拘らず、上人一代の御經歷に關しては、世に知られてゐる事が餘りに少かつたのであります。

法國山阿彌陀寺には三種の上人傳が傳つてゐます、その一は彈誓上人略傳（卷子本一卷）で、漢文で認められた上人傳であります。これは享貞元年に念來寺空幻（念來寺は信州松本に現存）が、相州一の澤の空譽上人寂心律師と協力して、京都大原光明山阿彌陀寺に傳る殘缺した上人傳を本として、補修を加へたものと卷末に記してあります。その二は彈誓上人繪緣起（三卷）で、此は平安朝式な文章で詞書がしてある立派な上人一代記繪卷物で、製作年代も作者も不明です。その三は彈誓上人繪詞傳（刊本二卷）で、繪入國文の上人一代記です。

作者は洛北古知谷阿彌陀寺現住安蓮誓信阿宅亮と署名してありますから、彈誓上人示寂の地、京都大原の光明山阿彌陀寺の住職宅亮が、寺に傳る舊記を本とし、各地方の上人遺跡の寺々に尋ねたゞして書綴つた物を、尾張の八事山空華尊者の校閲を經て、京都寺町通五條上ル藤井文政堂山城屋佐兵衛方から出版した者で、空華上人の序にも、宅亮和尙の跋にも、共に明和四年と記してありますから彈誓上人略傳より約八十年後の著述であります。

この三を比較するに、部分々々には出入詳略の差がありますが、大體の筋はよく一致してゐますから、恐らく京都大原の光明山阿彌陀寺の舊傳が、殘缺してはゐても此等各著述の基礎たるに足る物であり、且又後の著述は前の著述を參照してもゐるのでせう。

古來敎界偉人の傳記に奇蹟的な說話の附隨するは常で、彈誓上人傳もその例に漏れませんが、之に依りて上人の修行の跡と、化導の事業、と東海東山北陸諸道及び近畿經歷の順序とが畧分明し、一面には上人の巡錫化導の遺跡たる諸寺院が各地に散在現存して、偉大な德化を忍ばせると同時に、此の上人傳の大筋の決して荒唐不稽でない事を證明してゐます。

唐澤阿彌陀寺の寶物に、白道上人の消息一通があります、其の文面は次の通でありま

す。

夢の世まぼろしの古事なればはや〳〵こんせうにてはかうがんは有まじく候
いつか一れんたくしやうとなりてさんくわい申さばやとのみねがひまゐらせ
候おりふしにこまごまとふみたまはり候たんせいそなたゑいらせ候てさぞさ
ぞ御よろこびすいりやう申まゐらせ候いよ〳〵御ねんぶつすゝみまゐらせ候
けんを見てひとしからんとおもへぐなりといるゑどもけんなるべしとかゝれ候
へばよく〳〵御つとめわれ〳〵までもゑかうして可給候南無阿彌陀佛

浄西坊返し　白道

白道は有名な江戸の神田山幡隨院を開いた傑僧で、彈誓上人と一たび相見て舊知の如くであつたと上人傳中に見えてゐます、浄西坊は上諏訪河西氏の出で、唐澤阿彌陀寺の開基であります。

右の消息に因つて推考しますと、浄西坊は佐渡から越後を經て入信された、彈誓上人を迎へて念佛修行に精進し、事の由を江戸なる幡隨院白道上人に詳報したので、白道

上人から此の返信が來たものと思はれます、浄西坊に因つて彈誓上人が諏訪に迎へられ、彈誓上人に因つて唐澤が世に顯れ、浄西坊の幡隨院上人への通信が緣となつて、他日白道彈誓二上人の會見が行はれた者とすれば、浄西坊も彈誓上人傳に見のがす事の出來ない一役を勤めた譯ですが、前掲三種の上人傳は、遺憾ながら斯樣な點には調査研究が及んでゐなかつた樣です。

「彈誓そなたへ入らせ候て云々」は彈誓上人が貴地へ御出でになつて嘸嬉しいでせうと、浄西の上人を迎へ得た喜悅に同情を表したもの、「賢を見て齊しからんと思へ云々」は、彈誓上人の高德を師表として彌念佛修行に專心せよとの激勵の意味と解せられます。

斯樣な次第でありますから少くとも、諸地方に散在する上人の遺跡地に就いて、古文書や口碑傳說等の精密な調査研究が遂げられ、其の結果が綜合整理されて確實な上人傳が世に出で、上人の高風偉業が益光を發する日も遠からぬことゝ思ひます。三種の上人傳の如きは、其の際の參究資料として第一に數へられるべきものであり、今日一わたり上人の事跡を知らうとするには不可缺の文獻でありますが、寺寶として庫中に秘められて世人の目に觸れる事も少いを遺憾とし、茲に其の三種中最古いと推測される彈誓上人略傳の漢文なのを畧逐字譯的に飜譯し、更に繪緣起及繪詞傳より十餘條を

引用補綴して參照に資したのが此の小冊子であります。
今日の所謂傳記といふ概念には吻合しない性質のものでのありませうが、之に依りておぼろげながら上人一代の足跡をたどり得て、偉人の偉人たる所以の幾分なりとも世に明になり、上人の操持や主張の一端なりとも推知され讃歎されて、因つて唐澤の遺跡も一しほの光を添へて眺められる樣になるならば、此の小冊子發行が徒事に終らなかつたを喜び得ると思ひます。

彈誓上人略傳（原漢文）

夫レおもんみれば、法は人によりて弘まり、人は法を持して盛なり解の惑はざるときは必ズ德を招き、敎の廢れざるときは能く益を垂る。其レ然らざらんや。こゝに彈誓優婆塞は、尾州海部郡の人なり。母は青山氏の族、一生寡婦にして、終に梵行を壞らず。その性は甚ダ聰明にして、容儀また絕倫なり。故に父母共に議りて花洛に趣かしむ。もつぱら禁裏に仕へて年あり。漸く齡かたぶきて後、舊里に還り、纔に懸命の地を得て假に草廬を構へ、深く柴門を掩ひて、偏に後の勤を爲すと云々。或る歲の二月十五日の夜、夢みらく、彌陀三尊目前に現れ、名號を賜りて之を呑ましめ給ふ。覺めて後懷姙し、身心甚ダ快然たり。婦私語していふ、「吾夫を愛するの念なし。忽ち夢に感じてはらめり定めて是レ稱名弘闡の法子ならん」と。果して翌年四月望の日誕生す。（此の時人王一百六代の帝、後奈良の院の御宇、天文二十年辛亥の歲なり。今師自筆の年譜にいふ、『如來滅後五々百歲已に過ぎたり。この故に我出世して末代を濟はんと欲す』と云々。最これ如來入滅周の穆王五十三年より、天文二十年に至りて、二千五百一年に當れり。）俄然白旗二旒產屋の上に飛び來り、見聞の緇素奇異の思を爲さゞるはなし。

昔日秦氏妙海剃刀を呑むと夢みて空公生る。誕生の日に當りて白旗二旒庭上の椋の木に掛る。古今異りといへども瑞相これ同じ。（問、夫無くして子を生める者ありや、答、玄妙玉女流星を感じて老子を生めり。今また夢を感ず。信愛を以て之を生める者か。）此の夜母また夢みらく、佛來りて蓮華を授けて宣はく、「汝この華に乘りて平産すべし。又小兒の名を彌釋丸と名くべし」と。夫レ無憂樹の下には七寶の蓮華を生じ、釋尊出胎して現行七歩したまふ。今の瑞夢その相以て類す。最モ信仰すべき者なり。思ふに夫レ能生の母堂身心潔白の故に、所生の童子清淨の行者か。又蓮華を感得すること、その標する所あるか。如蓮華不著水の經文、これ人中の芬陀利の金言、宛も符節を合するが如し。事蹟たゞ人に非ず。定めて神妙の義あらん。

爾後四歳の時に至りて、始めて彌陀三尊を見たてまつる　僧形にして現じたまふ。（此はこれ隨類應現の形なり。）この時阿彌陀佛を見て「阿彌陀、彌陀、彌陀」と唱ふといふ。三字の果號これより口に絶たず。

彈誓上人繪詞傳に曰く此子四歳の時彌陀の三尊化して三の童子とあらはれ來りて阿彌陀の三字を口ずさみ小兒をなぐさめ給ひけり、小兒これより怠らず常に阿彌陀々々々と唱へける上人一生是を忘るること能はず後に當山居住の時初夜勤行の式とし給ふ今に至りて其式改むる事なし世に大原念佛と名づけ又は三字念佛とも號す

後七歳の時はからずも井底に落つ。母驚きて之を出さんとす。忽然として綱引の彌陀を感得す。即チ彼の綱に依附して出る事を得たり。將に謂はんとす「大願業力惡人を攝取す今則チこの相を顯すか」と

漸く以て生長して九歳の時に至り、世の常ならざるを悟りて菩提心を起せり。これに因りて母堂の許に至りて志を述べていはく、「吾今靜に思ふに、受けがたき爪上の人身を受け、値ひがたき曇華の佛敎に値へり。又つら〳〵眼前の無常を見るに、草露風燈よりも危し。唯速に夢裏の榮耀を厭ひ、疾く常樂の寶地に到るべし。然らば即チ行脚遊方して、將に大法を覺らんとす。但シ母世に在す間、晨昏の禮を致し、水菽の孝を勉むべしといへども、然れども亦恩を棄てゝ無爲に入るはこれ眞實に恩を報ずる者なりといへり。唯願はくは、母今一旦の別離を愁へて、永日の悲歎を貽すこと莫れ」と。慰言再三に及ぶといへども母之を許さず。童子之を奈何ともすることを得ず。故に歎きながら歳月を送れり。されど遂に止まず。時々調へ賺して、漸く以て承諾の語を聞く。この時悲喜こもごも流れて子心に東西を知らず。又別を惜む愁恨は、老母の胸懷を塞ぎ袂に餘る悲涙は小兒の玄鬢を滋せり。理なる哉。夫なくして唯子のみ。將に誰をか恃とせん。父無くして但母のみ。當に誰をか怙とすべき。されど若し愛網を出でずんば、出離何レの時ぞや。母も母なり。子も子なり。且ツ發心實に難し。豈に之

を妨ぐることあらんや。終に別を取りて發足しきりに急ぐ。

既にして遊方歳有り月あり。隨意自在にして勞倦せざるなり。後十二歳の時、手づから薙髪して清淨大悲の沙門となる。夫レ出家とは生死の家を出でゝ涅槃の城に至るの稱なり。故に長阿含にいふ、「沙門とは恩愛を捨離し、家を出で道を修め、諸根を攝御して外慾に染まず、一切に慈心して傷害する所なく、苦に逢ひて戚ます、樂に遇ひて忻ばず、能く忍ぶこと地の如し」と云々。今師の本志定めて此に在らん。自然の發心誠に言の葉を絶す。若シこれ宿習開發の人に非ずんば必ズこれ再來底の古佛たるべき者か。しかして美濃の國府に往き、塚尾觀音に參籠し、座を起たずして百日を期せり。期已に滿ずる夜、大士薙染の形に變じて、彈誓を拜したまふ。つら〳〵おもんみれば普門示現に即チ比丘比丘尼に現ず。利益無窮の故に、應變も亦無量なり。

（問、上位に在りて、下位に拜すること、何の意ありや。答、恭敬の心は聖者又常なり。いふが如くは、不輕菩薩は四衆を拜し、惠遠法師は螻蟻を逾えずといへり。また別に所以あり。口傳を聞くべし）こゝに居住して六年を經たり。又同じ國の武義の郡に草菴を構へて、十七年の星霜を送れり。然るに此の間の修行人曾て之を知らざりき。しかも此處を去りて後、假に俗形となれり。その故いかんとなれば、將に入唐せんとする計略なり。然るに或る夜の夢に、彌陀尊來りて告げて宣はく「汝が緣猶この國

に在り。敢て以て他方に去ること莫れ」と。之に依りて則チ入唐の思を止む。これより以後諸方に遍歴して群品に結緣す。

彈誓上人繪詞傳に曰く是より同國武儀郡の山奥に柴の庵を結び一心不亂に稱名を修行せらる光陰遠に移りゆきて程なく二十餘回の春秋わたる髪鬚を剃るに遑あらざれば居だけに生まさり宛も仙人のごとし

或る時江州に遊びて守山に至る。こゝに村人師に告げていはく「八洲川の橋のほとりに、近來變化の物あり。夜々出現して道行く人を惱ます。故にたそがれ以後は往來すること能はず。日已に晩に及べり。汝往くこと勿れ」と。師之を聞き、竟に彼の橋の上に至り、終夜念佛して坐せり。例の如く物ありて現ず。之を見るに即チこれ女子の死靈なり。彼近くすゝみていはく、我一生不善の故に、常に山野にさまよひて苦を受くること斷えず。幸に今師に見えたてまつる。願はくは哀愍を垂れて我を拔濟せしめたまへ」と。師即チ之に念佛を授くれば、忽爾として見えず。後更に出ることなし。應に得脫炳焉なるを知るべき哉。誠に一旦の娯樂に耽著して當來の善根を營まず。一生空く過るが故にかゝる苦を受くるなり。尤モ恐るべく悲むべし。

或る時（九月十五日なり）洛陽に至り五條橋のほとりを過ぎしに、東北の空中に當りて三尊來迎したまひ、師まのあたり之を拜す。身心歡喜して毛孔咲むが如し。この時心眼即チ開き、緩々地に至る。唯獨自明證智、之を鑽れば彌堅く、餘人不見の境界、之

を仰げば彌高し。（思ふに彼の來迎の處は今の光明山なるべきか。）
或る時攝州に遊歷して一の谷に至り、戰場に獨坐して舊靈を吊ふ。その時三鬼現前す。師心動くことなく專心に稱名す。彼等各忠度通盛敦盛といひ、即チこれ三人の靈なるが、今師の慈愍力により、修羅の苦患を免れて、應に善處に生るべきなりといひて、各喜の相ありて失せぬ。
或る時彌陀一佛來現して宣はく、「汝信心至誠なるが故に、我今汝に寶蓮華坐を與ふ。當にこの坐に乘りて我を拜すべし。」と。前に已に老母に之を授けたまひ、今また彈誓に之を與へたまふ。此はこれ安養一蓮の相を表示し、母子相見の瑞を兼彰したまふか。
或る時紀州に遊歷し、熊野に參籠し、至心歸命通夜持念す。時に一女人あり（紀州加津麻の生侶なり。）三十三所の觀音を巡禮し、終に權現の寶前に詣でゝ、八葉大鏡を以て之を神前に納めて退く。こゝに權現老僧に變じて、之を師に與へて宣はく、「汝はこれ佛法弘通の聖なり。まさに此の明鏡を以て、須らく一切衆生の善惡を浮べ、利生の本懷を遂ぐべしと。夫レ明鏡は無心にして而も諸相を現じ、慈心は無差にして而も衆生を度す。神言の示したまふ所、意此に在るか。（彼の鏡今に光明山にあり）
然して後四十歳の時天正十八年の春、北陸道に下向し、加古の津に至りて、暫く山居したまふ。同年佐州に渡り相川の市鄙に交りて窮民を救ふ。然るに其の作業たるや、

或る時は山に入りて薪を樵りて賤の男の肩を息め、或る時は澤に下りて水を汲みて賤の女の頂を助く。飯を炊き竈を燃くの事は尋常にして珍しからず。寔に無價陀婆となりて貧家を助く。夫レ大悲深行者これ則誰か之を怪しとせんや。然るに執作施爲、手に念誦を棄てず。跳踉轉蹶、口に寶號を絶たず。見聞の諸人太ダ以て之を奇とし、各相議して出家を勸む。終に止むことを得ずして、同州川原田の縣常念寺にして、師に依りて薙髮し、初めて法衣を著し、則チ道場に入りて一心に念佛し、寢食俱に亡して而も曾て勞倦せず。食時もし至れば則チ他來りて趣かしむ。呼に應じて食ひ、食ひ竟へて入る。旬を過ぎ月に滿つれども猶未ダ倦むことを知らず。念々聲々唯これ彌陀なり。師範之を美むといへども徒衆大に之を憎みし故に、永く衆に交るを厭去りて別房（常念寺下の坊也。）に獨居し、捨飡を拾ひて鉢盂に畜へ、長日之を食ひて信施を費さず。誠に以れば一切諸有情朝夕滋味を嗜み、日夜惡業を作りて、多劫地獄に入りて更に出期あることなし。是を以て今師只殘羹を食ひて更に食を貪らず。纔に身命を繼いで、偏に道業を修む。つら〳〵先蹤を訪へば、大唐の國清寺にて、拾得食堂を知り、尋常餘殘菜滓を竹筒の中に收め貯へ、寒山もし來れば則チ負ひ去らしむと云々。事蹟彼に似て崇敬餘あるか。
その後（天正十九年冬）同國にて檀特山の洞に入り、俗塵を抖擻し五穀を斷絶して、

木食草衣し、深く岩窟に籠りて人世に渉らず、苦行六年誓心勇猛なり。或る時異類異形の外魔現前して障礙を成さんと欲す。師更に動せずして單心に念佛せしかば、徐々として退きぬ。昔陳仲舉鬼を見て念佛せしかば、鬼魅忽に退き、終に具信往生せりとかや。これ其の類か。或る時白色の男鬼現前し、鐵棒を以て師を打たんと欲す。師寂然として驚かず。暫く權實を窺へり。その時東方より醫王善逝示現して宣はく「汝知らずや。これ則チ西刹の教主なり」と。果して本地の相を顯して、彼の鐵杖を以て師に付與して隱沒せたまふ。又白色の女鬼來り現ず。師又安然として坐せり。是に於て觀勢二大士僧伽に變形して、合掌して師に告げたまはく、「此の鬼も亦これ彌陀尊なり」と。即時に七寶の宮殿を現じ、彼の鬼この殿に入りて歸り去りたまへり、（白色を現ずるは西方は金にして白色の根本なるが故なり。男女を現ずるは阿彌陀佛は兩部不二なるが故なり。次に猶骨體の相を顯すは未分の體を示すなり。此はこれ本色住山の事也。）佛はこれ應變自在の德を具したまふが故に、或は神頭鬼面を現じて、以て物を折き、或は佛形祖相を顯して、以て人を攝す。攝折の方便たゞ利濟に在り。最も信仰すべき者なり。或る時彌陀尊骸骨となりて師に告げて宣はく、「汝今大事を悟らんと欲す。須く肉身を捨つべし。この故に我骨體の相を示す」と。蓋シこれ隔時の往生を示したまふか。大論に曰く、「もし無生忍を得れば、一切結使を斷ずれども、死す

る時は此の肉身を捨つ」と。涅槃疏に曰く、分段質碍は、煩惱盡くといへども、必ズ報を捨つべし」と云々。登地の菩薩は即チ分段の惑を斷盡すといへども、命終の時に必ズ肉身を捨つ。いかにいはんや凡身に於てをや。（諸の修行者こゝに於て宜しく眼精を著くべき者なり。もし人死を怕れ生を貪らば、いかでか解脫を得べけんや。）

或る時岩泉に浴す。この時五社の善神（天照、八幡、春日、住吉、熊野）來現して師に告げて宣はく、「汝苦行年ふれども、終に未ダ神道を知らず。生を神國に受けては、之を知らざるべからず。然るに神道の神秘は凡骨にては得難ければ、汝をして肉身を轉ぜしめん」と、その時春日大明神右に在す。住吉大明神左に在す。熊野大權現前に在す。八幡大菩薩智劍を以て師の背後を裁ちたまへば、天照皇太神々水を降して師の頂上に灑ぎたまへば、即時に平復して其の痕を殘さず。これ更に夢に非ず現に非ず。忘れて而も覺えぬ。却り來りて諸方を見れば、猶睡夢の覺るが如く、身心輕安にして、明了不昧なり。誠にこれ換骨の靈方を與へ、怡神の妙術を施すか。これより以來見聞の事々憶持して忘れず、心鏡明了にして諸相を現ず。これ神道の秘訣を明にして悉く以て之を傳へたまへるなり。夫レ釋尊出生の六年は、勤苦して一麻一米を食ひ、明星を見て悟道す。今師も亦六年の苦行を以て、忽に神變を感じ、既に大事を得たり。分

滿異りといへども事蹟相似たり。神用實に測りがたし。豈に之を信ぜざらんや。（神道の秘訣は盡く光明山に在り。）

或る時閑洞に獨坐して單身稱名す。この夜一天晴明にして萬境寂然たり。時に崛内赫奕として宛も晝の如し。こゝに三身の如來忽然として降臨し、師起ちて之を拜したまふ。身毛よだちて桶の底を脱くが如し。須臾にして彼の山高妙報土となり、地下地上四方虛空の莊嚴、宮殿樓閣水鳥樹林の體相、全く安養界に異らず。彌陀覺王忽に廣大身を現じて、寶蓮華に坐したまへり。大日如來最勝蓮華如來釋迦牟尼如來を上首として、十方如來一切菩薩摩訶薩等、上天の星の如く羅列し、胡麻種の如く並坐したまへり。その時阿彌陀佛尊唇を動し彈誓に對して微妙法を說きたまへり。また彈誓を呼びて、十方西淸王法國光明彈誓阿彌陀佛と名づけたまふ。會坐の儀式、說法の深妙、言を以て宣ぶべからざるなり。（師之を結集して六軸の經となし、題して佛說無量彈誓經と名づく。此の經今に光明山に在り。）說法既に竟りて即チ白蓮所乘の彌陀尊の頭を以て、觀音の御手より直ちに彈誓に授けたまふ。（これ亦今に光明山に在り）こゝに最極の大事、念佛の秘法を傳受す。（慶長二年十月十五日なり。初三重の相傳、聊カ藤田流義の三身十念の相承に似たり。但シ猶同中に在りて異る者なり。）昔日源空上人は、夢定中に於て、念佛の奧旨を光明師に受けたまふ。今彈誓上人は現在前に於て、

稱名の大事を彌陀尊に稟けたまふ。然るに彼は上世にして而も智人、此はこれ末代にして而も愚者なり。又彼は夢定中にして而も垂迹傳受なり。此は則チ現在前にして而も本地の相承なり。その相やゝ異りといへども、實は差なし。或は寂寥恒一といひ、或は本迹一致といふが故なり。嗚呼濁世末代の奇特何事か之に如かん。意を發して信仰すべき者なり。然して後誓公度生の悲願に乘じ、人間に來往して弘通の本志を憶ひ、民間に近づき住む。その初、機緣未ダ熟せざりし時には、猶未ダ彼の山を出でず。但樵夫の路に横りて念佛を授くるのみ。その時郡民悉く以て恐怖して近づく者なく、終に往來を絶ちて薪を採るに便を失ふ。これに因りて民の竈の烟絶え、市廛大に苦む。故に各相議して山を狩りて終に之を捕ふ。その鬚髮地を拂ひ、慈眼光を放つを見て、或は天仙かと疑ひ、或は佛陀かと恐れ、之を見る人は忽に歸伏し、之を聞く人は悉く信仰す。既にして寶號忽に人口に滿ち、名號漸く民舍に遍し。これより以後道俗群集して應請間無し。弘法及びて以て利生日に盛なり。故に名號を授けて菫酒の穢を制し、また日課を示して精進の德を敎ふ。

彈誓上人繪詞傳に曰く……列卒を催し山を狩て糺明する所に思はずも上人柔和忍辱のありさまに稱名聲澄わたり聞えぬれば各隨喜の涙を流し藤や葛を取集め木の枝を結びつなぎて輿に作り上人を舁のせて麓の里に歸り各供養禮拜し貴賤群集して利益日々盛なり其行化の跡寺となりて彈誓寺と號す其外佐州の內

に上人の舊跡五六箇寺あり

こゝに經宗の俗士あり。ひそかに師の德を忻慕して名號を得んと欲す。されど異宗たるに依りて、師の與へざらんことを憚る。猶止ることを得ずして、終に料紙を求めて時節を待つ。或る時先見の檀緣を以て上件の意願を歎く。師微笑して曰く、「我已にこれが意願を知ること久し。故に名號を書寫し竟んぬ。汝還りて彼に示せ」と。此の人之を怪むといへども、還りて之を示す。彼即チ匣を開いて之を見るに、貯ふる所の料紙に名號已に現ず。師の言の違はざること恰も神の如き耳。國の民ます〳〵信仰して、招請先後を爭ふ。師の到る處、商人隨ひ行きて紙を賣り筆を賣り又墨を賣る。佐州の結緣漸く滿ちて、終に海に浮び越州を遊歷して信州に至り、諏訪下原の郡境にて殊に大に化を振ふ。（此の間五年を經）

彈誓上人繪詞傳に曰く佐州の機緣漸に純熟しぬと覺ゆれば餘國も結緣あらましく實相無漏の大海に衆生濟度の舟うかめ大悲大慈の風ふけば方便利生の帆を揭げて還來穢國の岸につき越後信濃の境にて大に利益を成し給ふ諏訪の山邊の唐澤にはじめて一字を造營し自額して光明山阿彌陀寺とこそ號しけれ晝夜六時の勤行に參詣市をなしにけり德行日々に顯れて山より落る瀧つ瀨の幾代にたえぬ利益ならまし

彈誓上人繪詞傳に曰く飯田の阿彌陀寺大町の彈誓寺松本の念來寺百瀨の昌念寺雲照院も上人を以て開基とし念佛不退の道場なり

その頃甲州に一道者あり。その名を故心上人といふ。或る時暫く稱名の床に眠り、夢

に彈誓上人に謁（まみ）えしが形相殊異にして凡人に非ず。容色端嚴にして神威量り難し。翠髮腰を過ぎ、左手膝に垂れ、慈悲の相は靑蓮の眸（まなじり）を顯し、攝取の粧は白毫の光に現ず。首に寶冠を戴き、耳に玉環を貫き、遍身金色にして素色の衣を纏ひ、右掌より白雲を出し、雲中に三莖の蓮華を生じ、口中より光明を放ち、光中に三尊の化佛を現ず。化佛則チ雲中の蓮華を踏み、圓光普く四邊の山野を照し、嚴然として九重寶坐に乘りたまへり。俄然として驚き覺めて、四方に尋ね求めて上人を敬禮せんと欲す。然るに即チ機緣純熟し感應方に現ず。圖らずも翌朝來臨したまへば、歡喜に堪へず。五體を地に投じ、拳々服膺して、手の舞ひ足の踏むことを覺えず。歸依の色至りて深く、渴仰の思彌切なり。宿緣遂ぐる所、今復來る者か。（此の故心上人も亦たゞ人に非ず。）或る時遊方の砌、駿州に至りて或る寺に止宿し、佛殿の裏に臥す。夜半に至りて院主之を見れば、本尊光を放ちて故心を照したまふ。身毛（みのけ）もよだちて敬禮して去れりと云々。）この故に故心上人大願を發して自ラ夢中所見の尊像十餘幅を畫きて、以て衆生に施して利益を垂る。此はこれ郢人匠石時に相遇ふのみ。

彈誓上人繪詞傳に曰く……甲州光國寺には開山自作の坐像の眞影あり同國寶樹院郡內法國山光明院も又上人の舊跡なり

同じ頃（慶長八年夏の首。）關東に向ひ武州に奔る。こゝに白道上人といふ者あり。廣

く釋門の炬燈を挑げ、大に淨家の宗風を振ひ、東武湯島に於て淨土の叢林を營み、山を神田山と名づけ、院を幡隨院と號し、寺に新知恩寺と額す。從ふ衆、常に住すること數百箇輩、邪徒敢て以て之を嬈すこと能はず。然るに彼の白道上人久しく彈誓上人に謁えんことを望み、彈誓上人も亦以て常に白道上人に謁えんことを思へり。この故に兩師相互に瑞夢の告を感ず。是を以て道師書を馳せて誓公を招請す。（此の書今諏訪の阿彌陀寺に在り、その表書に曰く、進上彈誓如來と。）この時彈誓上人思に乘じて來りたまへば、白道上人願滿ちて迎へたまへり。各喜んで相見し、初會猶舊知の如し。清譚時を移し、法話日をかさぬ。（兩師方丈に入りて七日出でず。この間の閑談、人曾て之を知らず。或は曰く、道公は宗門の血脈を以て、之を彈誓に傳へ、誓師は此の時如來の眞訓を以て、之を道師に授く。宗脈と眞訓と、宛も符節を合するが如し。兩師感歎して、互に師資の契を結べりと。）この時相互に師となり弟となり、同氣相求めて芳契最モ鄭重なり。こゝに白道上人師に告げて曰く、「我今日より應に師の教誡に隨ふべし。然れども木食に於ては、靈門をして之に代らしめんと欲す。故いかにとなれば、我はこれ叢林の營務、曾て以て遑あることを得ず。然るに此の靈門は、其の器量たるや、利智精進にして道念太ダ堅固なり。敢て我に劣らず。故に以て之に代ふるのみ」と。師殊に之を可として大に歡喜し、流儀の源底を竭して、悉く以て靈門

に付與し已に竟んぬ。（此の靈門上人、幡隨の上足たるに依りて、其の選に應じて無上の良藥を傳へたり。爾りしより此の方、行業不可思議にして、諸人歸依すること稍道師に比し、亦誓師に類す。終に一字を建立して群生を濟度す。山を五臺山と名づけ、寺を源空寺と號す。その五臺山と名づくることは、境內別に突兀たる一峰ありて、高樓を營み、曼殊室利を安ず。故に彼の臺山に擬ふるなり。その源空寺と號することは、祖師の眞影を移せばなり。聞くならく誓師江州坂本に在すの時、禪徒競ひ起りて誓師を難ず。その時道師靈門を遣して、その難を救ふ。惜い哉人口早く亡びて其の瑣細を知らずと云々。）

或る時（同年九月朔日）智譽上人（白道上人なり）誓師に告げて曰く「今師の形狀また異相なる故、愚人之を怪みて信じ難きか。もし然らば利濟及び弘通應に闕如たることあるべし。願はくは師落髮あるべき者ならば、最モこれ欣然たるべし」と。師の曰く「我今世に出る、唯濟度の爲なり。落髮もし利益あらば、いかでか敢て之を辭することあらん」と。その時上人喜悅を懷きて、道場を嚴り、軌則を調べて、來日を待つ。その夜上人夢みらく、誓師佛身を現じ、上人の枕べに寄りて言へらく、「汝我を知らず。故に猥に剃髮せんと欲するなり。もし夫レ失あらば必ズ應に地獄に墮つべし。然れども汝はこれ智あり道ある故に、應に墮獄を免るべし。たとひ墮獄をば免るとも。

報命必ズ喪びん」と。上人覺めて後大に慚愧を懷き、疾く師の所に至り、謹みて懺謝の言を陳べ、戰々兢々として恐るゝ所あるが如し、師則チ微笑して落髪の事止めり。翌日此處を去つて相州に至り、箕根山に分け登り、塔ノ峰に居る云々。この塔ノ峰は、往昔天竺の阿育大王、八萬四千の塔を造り、一瞻浮州の界に賦る。今我が秋津洲にも、三處にこれあり。この峰その隨一なり。故に阿育王山と名づけ、塔ノ峰と號す。（その三處とは、其の一處は分明ならず。或は曰ふ、江州湖水の中に靡倒して在りと。但シ俗說にして信じ難し。其の餘は蒲生と此の峯となり云々。）誠に夫レ清淨靈妙の奇峯にして、山靈嘗て物の穢を受けず。東關無比の勝地にして、鳥獸更に其の跡を留むることなし。嶽頂高く聳えては、嶺嵐心空の雲を拂ひ、谷口深く徹りては、澗水意地の垢を洗ふ。青巖削り成せる粧、綠泉染め出せる色、最モ凡地に非ず。山に巖崛あり。崛内やゝ廣くして、風吹けども入らず。雨そゝげども滋はず。（入ること數歩にして崛内暗く、その廣さ縱橫三間餘、傍に回る穴あり。人之を胎内潛といふ。）師この洞に入りて一心に念佛する時、鄕人之を見て大に怪み、或は天魔鬼神の變ずるかと恐れ、或は狸奴白狐の化するかと疑ひ、漸々聞き傳へて終に國守に告ぐ。（この時小田原城主大久保氏四萬八千石の大守なり。）より山に狩し野に行きて此處に至り、則チ武士に命じて之を驅り逐はんと欲す。乃之に對ひて兵器を具へ、又之を責むるに猛

獸を以てす。然れども師更に動せず。恰然として念佛す。强ひて之を誅戮せんとすれば則チ人は五體屈し、獸は四支倒れ、刀刃忽摧け、弓箭また折る。諸人皆之を奇とし、遠く退いて各禮をなす。國守も亦以て大に歸伏し、終に居る所の一峯を以て、之に寄附し畢んぬ。爾りしより以來、國民傳へ信じ、道俗歩を運び、參詣の貴賤、往來の男女、連綿として日夜絕えず。路邊の假屋忽チ一千軒に及び、林下の草坐、寧ロあげて計ふべけんや。

或る時崛外の道場にて、通夜念佛したまふ。群集の道俗も亦一心に稱名す。夜半頃に至りて、空中より大磐石を拋ちて障礙をなす。當舍は微塵になるといへども、一人も失なし。（その石今これ有り。）或る時貴賤集會し、專心に念佛す。師夜半に至りて、崛内を出でゝ、一會に對して十念を授く。時に龍灯飛び來りて堂前の松に掛る。（其の松今これ有り。）數刻にして去れり。これより以後來ること度々なり。殊に此處に於て化道方に盛にして、尊卑緇素その化を受る者幾千萬の數とも知らず。終に額を草庵に掛けて、育王山光明阿彌陀寺と號す。

その頃小田原に善知識あり。大蓮敎寺に住持して群生を利す、その名を鎭蓮社鏡譽上人といへり、此の人殊に師に歸依し、入室問訊して更に間斷あることなし、或る時師にいひて曰く、「師異相たるによりて諸人之を怖る、願はくは剃髪せられなば濟度廣

からんか」と。師いふ「剃髪最モ易し。然れども剃らん者身命必ズ亡びん。」鏡譽のいふ「我死亡に於て更に以て痛むことなし。師と結縁せば來果疑はず。」と。則チ鬚を落髪し奉る。果して師の言の如く、數月を過ぎずして鏡公則チ命終せり。（慶長十三年三月十五日なり。）紫雲屋上におほひ、異香室内に滿つ。往生の本懐まさに掌を指す。これ則チ師と結縁空しからざる故なり。

或る時門人念光法師をゐて山間に下り、澤のほとりに遊ぶ。師常に鐵屐の重さ四五斤なるをはき、鐵杖の重さ三四斤なるを持つ。（これ即チ檀特山に於て、男鬼の授けし杖屐なり。今無常山に在り。）彼の鐵杖を以て河邊を穿てば、忽石間より温泉涌出せり。浴する者衆病速に治す。今の塔ノ澤の藥湯是なり。昔仲算大德劒を以て石を鑿ちて水を涌かしむ。彼の醒井の甘泉是なり。水湯異りといへども不思議は一なり。然るに仲算はこれ千手の應現なり。今師又これ何人ぞや。應に知るべし。

或る時容貌巍々たる貴女入り來て師に言さく「我聞く師に如來眞受法ありと。願はくは血脈を我に授けたまへ。」と。師諾して之に賜ふ。即チ布施物として、兩顆の玉を捧げ、（是を兩界の玉と號す。龍王の獻ずる所の明珠なり。此の珠今に光明山にあり）謹んで禮謝して辭し去れり。師之を怪み、ひそかに人を遣して、その蹟を追はしむるに、筥根山に分け登り、權現社に歸り入りたまふ。後に聞けば、彼の寶殿に此の如き

玉ありしが、鎖鑰を壞らずして、自ラ匣中より出でゝ失せぬと云々。

或る人（北條の嫡孫なり。）死して地獄に墮ちて、夢に子孫に告げて曰く「我地獄に墮ち、苦を受くること間無し。師を請じて供養せば、應に劇苦を脱るべし。」と。子孫大に驚き悲みて、即チ夢の告に任せて云々。

或る時大山寺の方に當りて、紫雲靉靆たり。師怪みて則チ山を越え溪を超えて彼處に到りて見るに、高山四に圍み、松柏鬱茂し、巖青霄に聳えて古徑崎嶇たり。終に一洞を穿ちて、山居寂然たり。是に於て念佛すれば、國民も亦隨つて至り、堂宇忽に成りて、淨發願寺と號す。（今の一之澤無常山是なり。）彼の岩洞前に大磐石ありて、紫雲石と名づく。この石上に於て日々紫雲を拜し、佛迎を感ず。或る日山上に紫雲あり。攀ぢ登りて之を見れば、雲櫻樹を纏へり。師即チ之を切りて、みづからの影像を刻む。然るに之を彫る半にして、熱血忽に流れ出づ。故に其の功を終へず。半作にして即チ止む。（斧作の御影といふ是なり。）感應繁多にして毫舉に遑あらず。

然るに此の一ノ澤と塔ノ峰とは、溪山相隔つること數十里、二山の間を日夜往來す。その疾きこと風の如く、亦鳥に似たり。或は晨朝塔ノ峰にして勤め、日中は一ノ澤にして行ふ。或は日中一ノ澤にして作し、初夜は塔ノ峰にして修す。兩山兼住の間、すべて六年を經たり。

その後駿州の小濱、遠州の堀江にして化を受くる者甚多し。是に於て塔婆を建立して、結縁の衆の員數を題す。凡ッ二百七十萬人なり。末世の大導師と謂ひつべし。

彈誓上人繪詞傳に曰く夫より遠州堀江の里館山の巖窟に入念佛し給ふに例の如く化を蒙る者市の如し鼓にして又一字を取立蓮花寺と號す濟度の人數都て二百七十萬餘なりき

堀江の里を初め近隣の男女毎年七月二日より十六夜に至る迄限り斷肉潔齋して白き浴衣に菅の笠を着各さをにすがり鉦と太鼓なうち交て聲をはかりに念佛す此事の由來を尋るに昔時甲斐信玄公合戰の節數萬の軍兵此里の堀江に沈み死したりき其亡魂雨夜毎に光りわたり聲を揚野山に鋭波を作る國民これを驚怖して上人に歎きければ上人告て宜く我教に遵ふて餝樣々々に念佛を修しなば再び出まじと示し給ひけるその示の如くつとめければ果して速にしづまりぬそれより永く傳はりて今に斯の如く修しぬることになんなりけるとぞ是又上人利濟の餘澤なり

然して後慶長十四年の春洛陽に至り、大原郷に棲む。彼の大原山は古今の靈區にして、遠近の勝地なり。梵唄日に新にして、聲明月に新なり。故に先賢之に棲み、後人古を慕ふ。是を以て彈誓道人諸州遍歷の後、終に此處に到り、遙に深谷に入りて、假に草菴を構へ、深く柴門を鎖して、專心に名號を唱へ、以て終焉を期する耳。終に草廬に額して光明山阿彌陀寺と號す。その地景たるや、四峯高嶮にして內に田園あり。綠樹森々として山上にそばだち、碧水涓々として岩下に流る。岩頭に至れば稀に樵歌牧笛の聲を聞き、山下に向へば唯竹煙松霧の色を見る。寺境寂々として遙に俗間に遠く

、道場沉々として偏に念佛を唱ふ。山賓彼に居れば信心自ラ至り、鄕人此に來れば切に感心を催す。已に謂はずや其の依身を求めんよりは寧ロその依處を求めよと。誠なる哉この言。都鄙遠近至る所皆敎に隨ひ、貴賤道俗往く處悉く化に靡く。四來日夜群を成し隊を成す。或は酒肉を禁斷し六字の名號を授け、或は葷草を制誡して一筆の判形を與へ、名號の大小に依り、機根の堪不に隨つて、日課を授くること等しからず。或は一二三四五六萬等なり。(光明大師三萬六万等の釋に合す。)

或る時檀特聽く所の深法結集して六軸の經となし則チ名を彈誓經と題す、然るに門人筆授して文正しからず唯信じて之を拜せんに何ぞ正不を論せんや。嗟乎。一期の衣物は紙綿布に過ぎず、一生の威儀は瓶衣鉢を離れず。朝暮の味に鹽穀を斷じ、日夜脇を席に附けず。竟日名號を書し、盡宵念佛を行ず。自ラおのが影像を彫りて之を故知谷に留む。その相宛も彼の故心上人夢中所感の像の如し。(此の外自作の像世間にこれあり。戒相全く一樣なり。)

已が落髮を以て頭上に植ゑて彼の光明山に在り。植髮の影是なり。然るに近來本寺の命に依りて九重の坐を除き、金色の相を改む。嗟乎聖にして聖を知る。豈に凡智を以て聖意を量るべけんや。恐るべし恐るべし。蓋シ思ふ生前末俗卑少の身なりといへども、滅後本地妙德の相を顯すか。時に人王一百九代の帝後陽成院の御宇慶長十八年癸

丑五月二十五日、自年六十三歳にして滅を示す。端坐合掌猶平日の如く光顔容色尋常より艶なり。音樂嶺上に響き、異香溪頭に薫ず。天花庭上に降り、光明室内を照す。洛中洛外の貴賤道路を塞ぎ山林に滿つ。七日結緣の後遺骸を廟崛に納め奉る。衆相儼然として永く存在せり。肉身不壞の大往生最も貴ぶ可き者なり。

彈誓上人繪詞傳に曰く或時京都の守護板倉伊賀守來りて上人に謁し深く歸依の心を發し隨從の大衆を後代の故障なからしめんが爲にとて制札を寄附せられける彼自筆の制札今現にあり法化日々盛にして道俗男女歩を運ぶ者幾千萬といふ數を知らず仍て商賈の輩門前に茶店を並べ山中さながら驛路の如し其時茶店を營たる輩直に住居して相續し古知の茶屋村といふ上人の勸誘によりて都鄙の貴賤惡を廢し善を修し捨家棄欲する者多し山居隨從の僧七十口に餘れり各樹下石上の意樂に住し如法念佛する樣いと殊勝なりき

又曰く上人曾て彌陀直授の傳燈前三重後三重等の口訣あり特に布薩の奥儀自染筆嚴重にして自他の往生專修念佛の一行に決歸し給へり是當山(古知谷阿彌陀寺)不共の傳なり此璽書布薩相承の者には蓮誓號を許可し給ふ是た一流の規矩と定められたり又上人所々山居の時は樹下石上に坐し本尊をも安ぜず聖教をも持せず香花をも供せず但口稱念佛の外他事なし

又曰く洛陽大雲院の貞安和尚は當時の豪傑なり上人の行狀異相なることを聞て難破を加へんが爲に伴僧と共に俗形となり當山に至る上人既に豫め此由を知りて自から門外に出迎へ彼等に對して異相をあらはし彼等が巧む所の旨趣を說たまふ時に主伴共に是を見聞して凡人にあらざる事を知り深く慚愧の心を起し慇懃に懺謝して退きぬ

又曰く上人の門弟多かる中にも念光法師は殊に深く師恩を重じ自も木食長齋にして常隨給仕せられける剩報恩に擬せんとて紫竹の光念寺田中の守興寺を造立し上人を以て開山として尊影を安置せられたり

又曰く上人一期の行狀質朴にして花美にわたらず衣物は布木綿紙子に過ず食物は抹香に松の甘皮を合せて石臼にて搗是を丸となして食し給ふに至る其石臼今現に在りて靈寶たり一生威儀嚴肅にして三衣を護持し暫くも離し給はず又徒衆の爲に七十三箇條の制誡を作りて教示す實に内外具足の大導師なり又時々和歌を詠じて法門を揭示し給へる事あり是則ち我國の風俗に準じて衆生を引接するの手段なるべし

抑上人の傳舊記これありといへども、(光明山)何人の製れることを知らず。空師の御傳と准じて而も繪詞傳たり。從來傳へて謂へらく、殿上に於て之を製ると云々。その畫像文筆の體最も尋常に非るなり。然るに彼の故知谷は、四山高く圍み、諸樹鬱密。溪谷深く透りて、雲霧朦朧。この故に濕氣の爲に壞れて章段多く缺けたり。僅に殘る所の畫圖を以て之を考へ、少しく餘る所の文章を以て之を綴る者なり

夫レ在世の奇特、滅後の感應、總じて師の德行更に禿筆を以て述べ盡す所に非ず。諸方に殘る所の筆蹟、或は形像等も、亦往々不思議を現す。或は火災に値へるに燒けず。或は土中に在れども壞れず。或は光明を放ち、或は異香を施す。神變これ多くあげて計ふべからず。今實に據りて之を記さば、恐らくは疑惑不信の輩、却て破法壞利の罪に墮ちんか。佛のたまはく、もし但佛乘を讃せば衆生在苦を沒すと云々。自筆の年譜にいふ、(光明山不出の秘書三通これあり。いふ、その一通は神道の秘傳なり。是

レ則チ五社所傳の大事なり。その一通は葦酒の誡文なり。此の事釋尊の所制たりといへども、今又彌陀覺王別勅を賜ひて之を誡む。即チその文なり。その一通は今師三國受生の事蹟なり。）我はこれ尋常の人に非ず。然るに凡夫愚眼我貢の罪厚うして、我を見知ること能はざる者なり、唯信せざるのみに非ず、却て復誹謗せり。破法不信の故に三惡道に墮つ。最モ以て悲しい哉。と云々。是レ即チ在世の昔、形を分段の塵に交へ、德を隱して誹謗を顧みず。今また示滅の後は、心を淨邦の臺に遊ばしめ、本を顯して懺悔せしめんと欲するか。誠に夫レ順緣逆緣、結緣空しからず。信者謗者、値遇憑ある哉。嗟乎かく道心堅固の上人、久修練行の導師、誰人か之を信せざらん。何レの輩か之を仰がざらん。且夫レ寶の山に入りて、手を空しうすること莫れ。又はた閻王に向つて赤面すること勿れ。信と謗と、得と失と、善惡智愚應に分に隨つて照鑑すべき者なり。

右驗記は、洛陽大原の阿彌陀寺に、これ有りといへども、上人行狀の文言、麁拙なる故に相州一之澤なる空譽上人寂心律師と心を合せて、之を淸書し畢んぬ。

貞享元年五月廿五日　　光明山念來寺空幻

昭和十一年七月三十日印刷
昭和十一年八月五日發行

（非賣品）

發行人　宮澤說賢　長野縣諏訪郡上諏訪町一萬番地
印刷所　宮坂印刷所　長野縣諏訪郡上諏訪町三四五九番地
印刷者　宮坂辰雄　仝縣仝郡仝町仝番地

▲正誤表▼

頁	行	誤	正
二	二	享貞	貞享
三	五	跛	跋
同	一三	事業、と	事業と、
四	一五	入信された、	入信された
六	二	性質のもでの	性質のもので
一三	六	亡して	亡じて
同	九	厭	眹
同	一〇	（常念寺	（常念寺
一五	九	裁ちたまへば	裁ちたまひ
一八	一二	繪詞傳	繪緣起
二一	一三	嚴り	嚴り
二八	一七	凡入	凡人

終